

車椅子の親友

谷 たか子

私には糖尿病で右脚を切断した友がいる。

三十年前彼女は、私が勤めていた呉服店に、半年遅れで入社してきた。私より四歳年上だったが、天衣無縫と言うか、天真爛漫と言うか、何もかも型破りな人だった。自営業の妻として、五人の子供を産み育てたというのが、とても信じられない程、世間知らずだった。大きな買い物はほとんど会社の経費で落としていたため、経済観念が乏しく、家計のやりくりに四苦八苦する私とは対照的で、驚かされる事も多かった。

初めて飛び出した世間というものが、彼女にはとても新鮮に思えたらしく、ごく当たり前の事にいちいち感心するので、彼女といると笑いの絶える事が無かった。

やがて私達は、お互いの長所と短所がびったり噛み合い、まるでジグソーパズルのピースのように仲良くなった。だが彼女は何をやらせても不器用で、着物の事も全く無知。すぐ辞めるだろうと私は思っていた。

ところが彼女には不思議な魅力があった。人の心をすぐに和ませてしまう。店長やチーフも彼女の失敗を笑って許してしまうのだ。着物のコーディネートが苦手な彼女は、喪服ばかり売った。それがまたよく売れて、店長は当時流行していた藤子不二雄のアニメ、笑うセールスマンの「喪黒福造」をもじって「喪服売造」とあだ名を付けた。体型がそっくりだったのだ。結局彼女とは十八年間、一緒に働いた。

今から十年前、突然彼女の息子さんから電話があった。母親が糖尿病で倒れ右脚を切断した。命は取り留めたが、谷さんに会いた

がっている」と言われ絶句した。定年退職後、彼女は孫達と甘いものを無制限に摂っていたらしい。現在は二女の家族と暮らしているので、その後は時々訪ねるようになっている。

先日、洋服の余り布で車椅子用のバッグを作り、メール便で送った。

彼女から留守電が入っていた。

谷さん郵便届いたよ、有難う。これ何？枕か？」

オイオイ、それはバッグだよ」

私は慌てて電話をし、二人でケラケラ笑った。

やっぱり彼女は相変わらずだ。その相変わらずが、私には嬉しかった。

